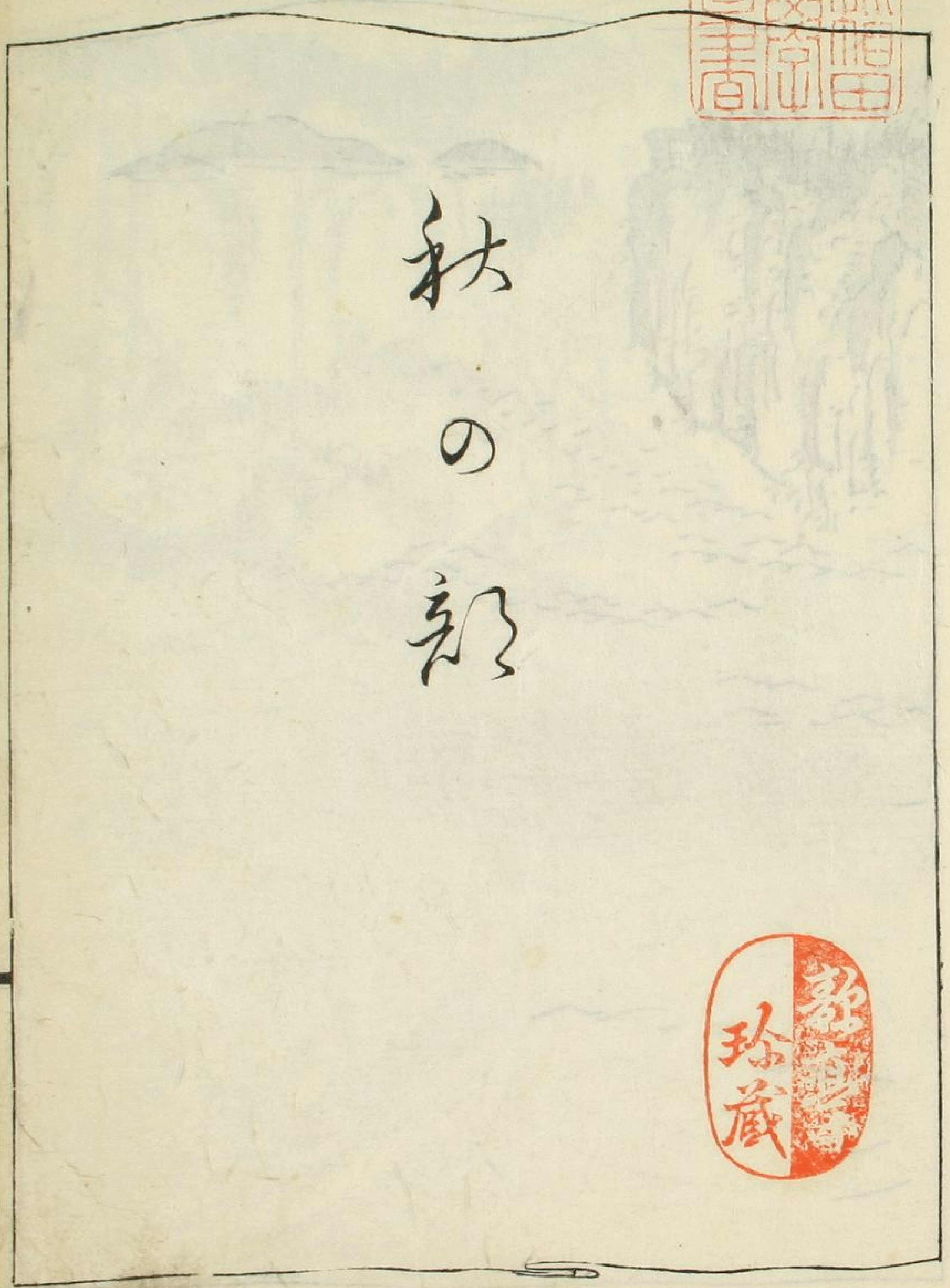
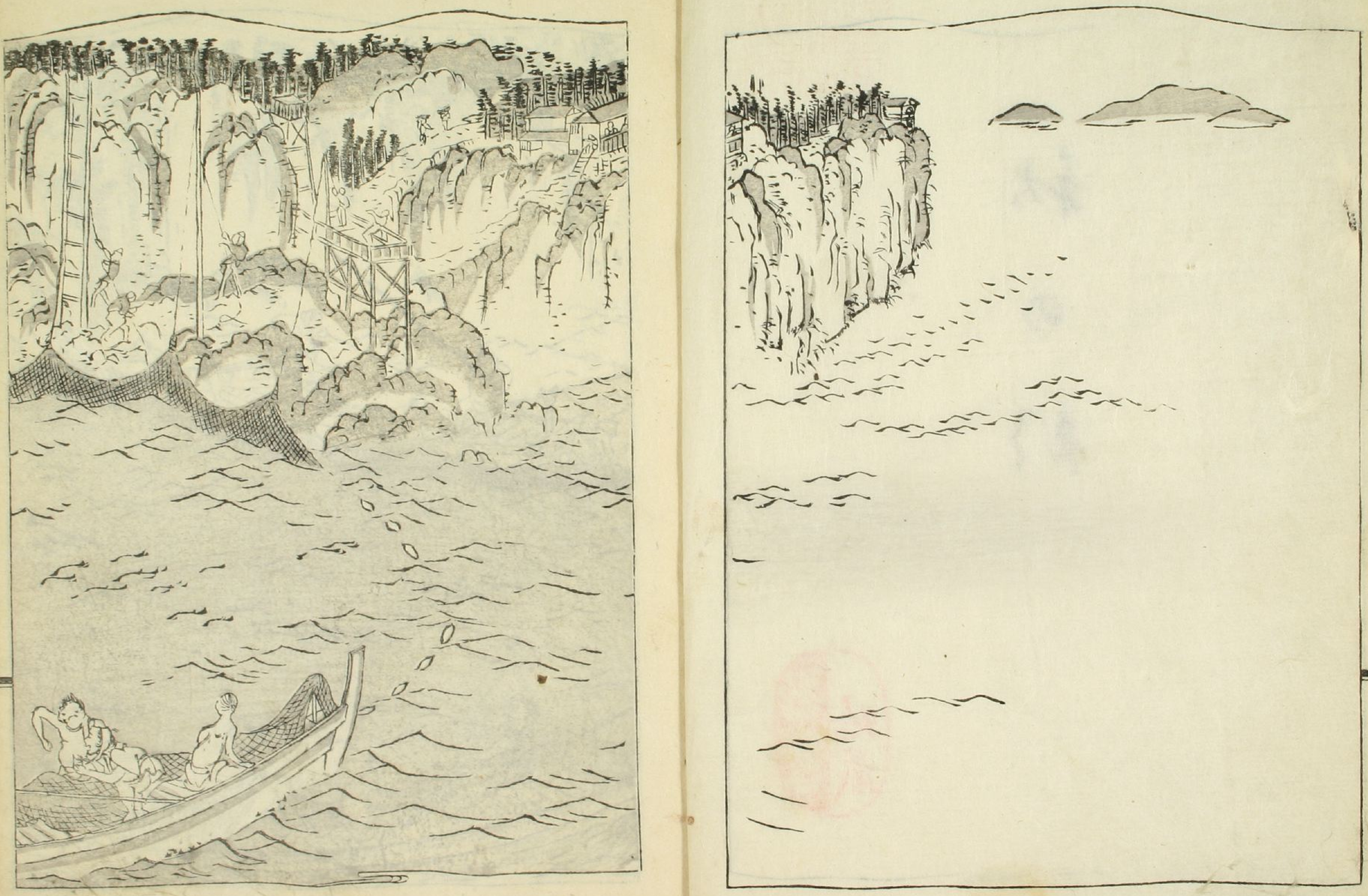
俳諧職業尽　坤

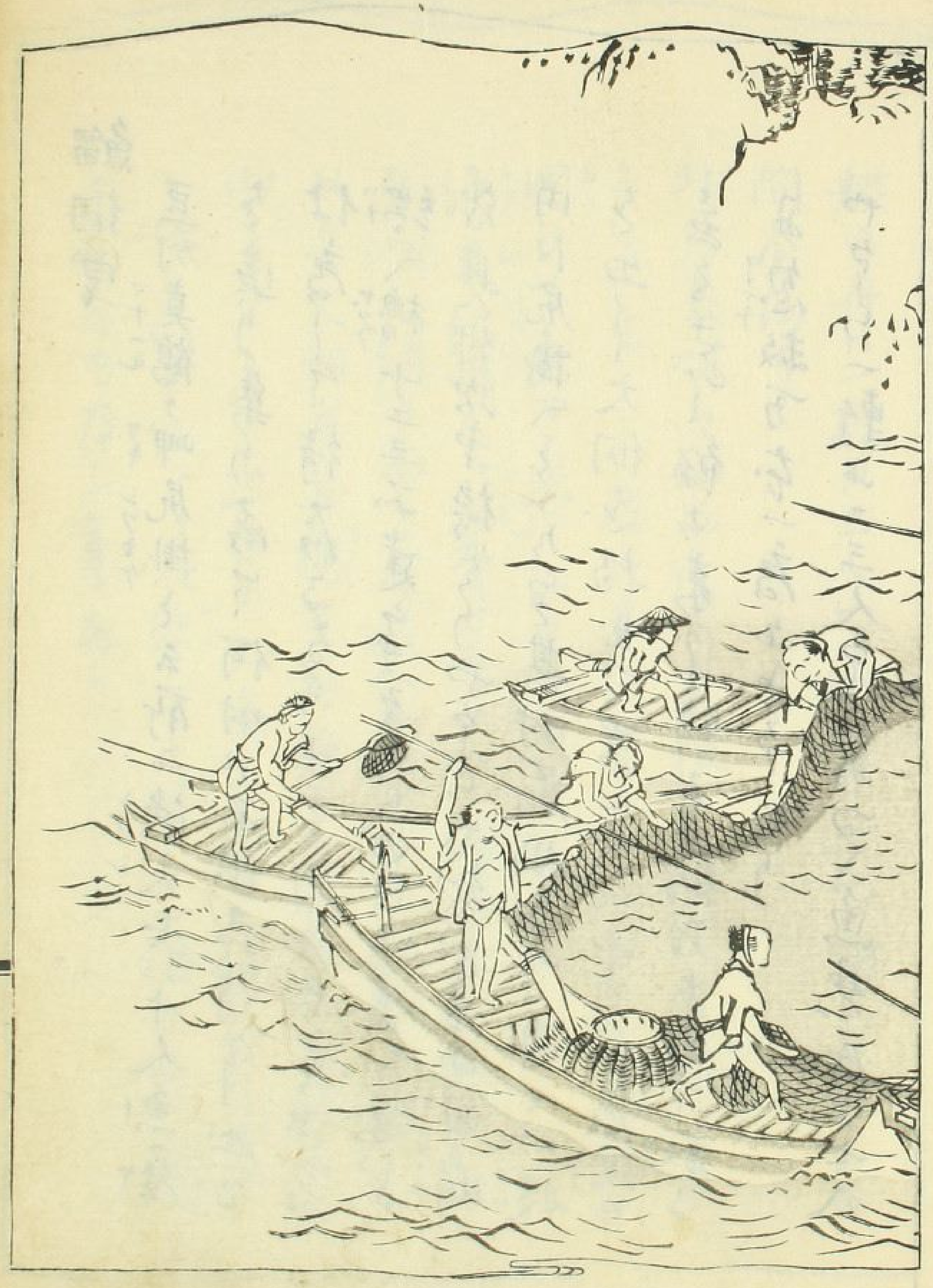
へ 5
1632
2



秋の部

門 別5
號 1632
巻 2





鰡網曳

豆州真鶴ヶ岬尻掛と云所に漁夫七八十人魚屋
を造り集り居て何時に不限昼時も出る
仕度して待居るなり十二三町手前に岩
端へ櫓十二三本建ならべのぼり魚の来る
を見付次第櫓よりやぐらへ知らせる小目瞬
内に尻掛へしらせ其時尻掛より舟七八艘
を出し大網を持出て岩岸に寄て張沈め
置くさて鰡の来し時に網をあけて取る
に忽数万本一度にとるなり
やぐら一軒に二三人づゝ居て魚見居る七八

艘の舟ハ一艘に三人づゝのりて出る網の大さ弐百
間余あり
此魚ハ何時にても岩根に付巡りて離るゝ事
さらになし一度に多くとらるゝ時ハ大生簀に
囲ひて生きながら江戸へ送るなり
漁夫紀州より来るよし以ちて成程思ひあるとて
ならん網の元をする人常に多く人数を抱へ
おき大網舟具櫓其外種々の入用大方なら
ざる事にて近在の大商人両三人組合て是を
うけもつといへり大漁ある時ハ一網の魚の價
千金にも及ぶ事あり

此漁明和天明の頃より初ると也

稲妻のやみの中に声あり鰯ひき　笛成

十九番

左　初嫁

鶉の声たえて初わたの秋　嘉梅

棠やおもはず来てみるけふの嫁　閑月

嫁もせむ何みてそめしや今朝の秋　蒼乢

取つきて往来の新やわたさぬ嫁　茶静

思ひ草不陰やおほく今朝の秋　葛三

江の光たゝらす来る鳥の秋　蒼虬

今渡る渦もとほきや秋の蝉　兎慶

起ん採る跡秋すゞし川の昼　里かめ

ちるや葉や秋の浅さも物忘れ　成美

初秋やとく起てみる樹の井　松什

秋の来て也水さやかなる入江かな　素芯

照中に秋立芦のちぎれ葉かな　茶静

手洗ひも見るれ秋立樹哉　葛三

秋立て見えぬ又田思ひの程　乎雄

蝉なくや星きぬらに鶏の晩　西里

残蝉　風

秋の暁ほのまさ見えて秋の風　岱年

秋風や蝶も見知る竹の上　葛三

鶴かへり杉静ありて蝉のこゑ　素芯

吹きみる中に秋風立ちけり程　茶静

秋風やなつかし杉の人まち路　萬之

人なれハ住とて吹や秋のくさ　成美

日和よし雨よし添ておきの風　露泉

秋風や芦の葉さきれかゝる舩らに　蕉雨

蛛風に斧鈎よする梅　手紙　岸居

手をこみて雀おさへし柿の梢　川峨

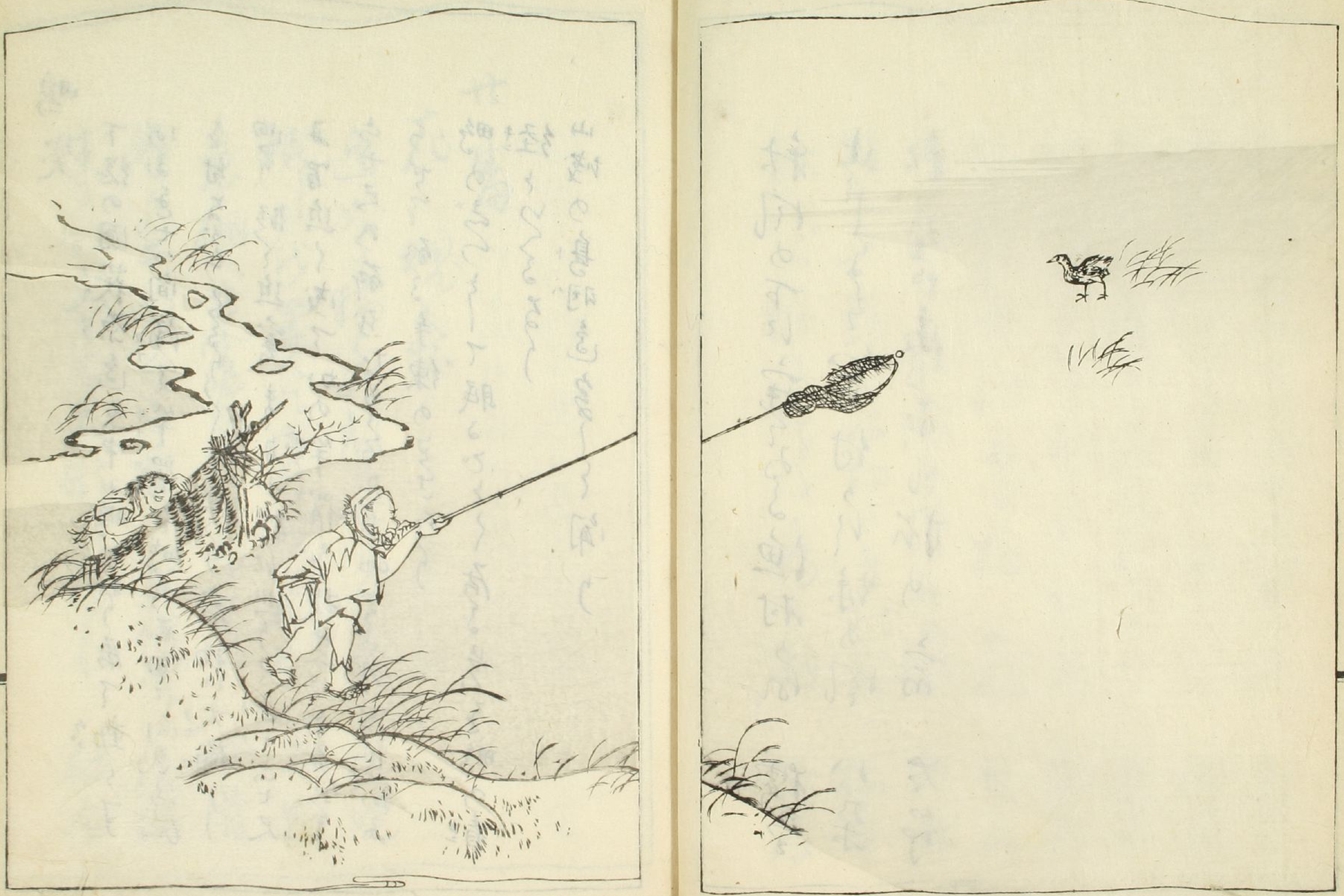
蜂をなや鶺鴒を切さる秋の菊　梅合

秋風や極てもとる鳥の羽　笛成

秋風の下に寐てみる漁村かな　樗堂

止らしまても吹付蛛の風　八朶

秋の野や庵るを郷し旅の宿　太節



廿番

左

現家

逆火手揚ぬ静けき世なりけれ　霧暁

嬉しさ我算へて去て現ふて世　作者不知

意悃へ世窮退六てかぬるか　山骨

婆日に出りしてうき見る盆供か　遅流

生手のるやうる人形のかけらか　梅谷

鴨突

下総の國荻原(ヲギハラ)邊原中に鴨のおり居て動(ウゴ)かす

ゐるを七八間隔(ヘダテ)て竿羅(サテアミ)を鴨の正面に向きおよび

を付ながらくるりくと廻りり最初ハ大輪(ヲホワ)に

廻り段〻近寄まゝ小輪に巡りて止(トド)て六七尺

ほど目近く成てかの竿羅(サテアミ)を投けてとる鴨ハ

六七尺の所迄なかるゝにあやまる事ハ羅をかふ

らせて取る手練のわざなり

鴨の気つとして眠るごとく居る是を鴨の看(カン)

経(キン)といへるなり

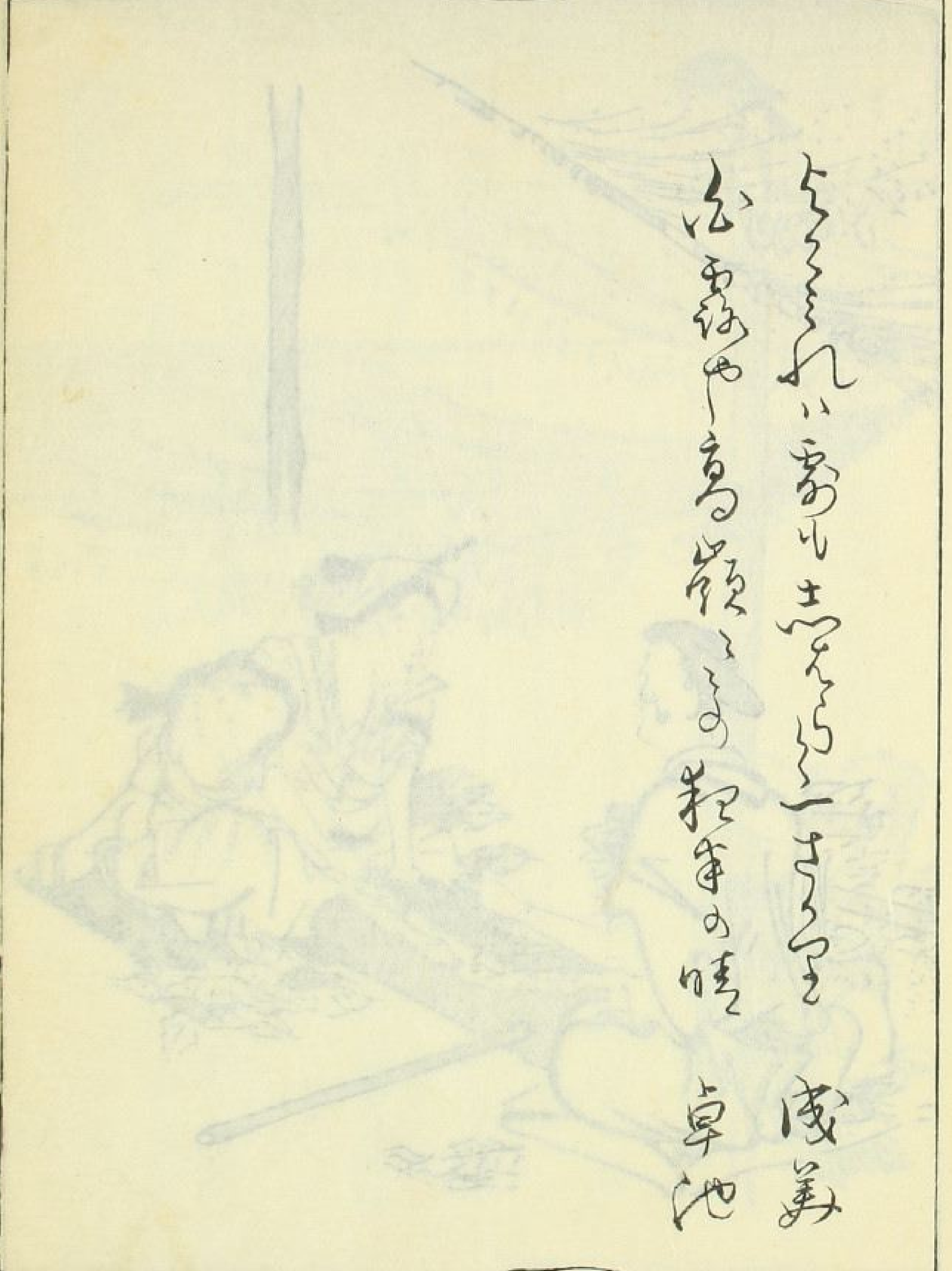
山城の鳥羽(トバ)邊にもありと聞り

貧さを謗せらる硯に川尾　ミよ女
硯洗の淋しさハいかなる情　青心女
上さらに鳥もあまし硯祭　茶静
生霊に松祈し物喰ふ神ならば　丙大
硯洗へ葉肉を見る竹鞋盤　茶静
俤初みとぬれしまや硯祭　梅令
傾城や扇の上手意至つり　酒一
何もなき暇ある日や硯祭　玄子

頼ミ程住へ傳ふる硯祭　酒一

右　つゆ

露ならぬ来さハ需さに出で来も　道彦
白露ハこほるゝ虫の名残かな　芋嶽
忘るゝ蜂飼ふ人もなし露の珠　露白
淋しさの娘も秋し露の珠　雅嵐
庵も気の露の珠のゝ物にもし　蕉



ともすれは露も志らす一さかり　浅美

白露や鳥も驚さる粗末の嘘　卓池

茶の下を焼きハ傳ふ畫の露　茶静

珠となる迄ハ露さへあはれなる　一茶

あはらくも知らぬ虫けや露の珠　詠帰

光明のさし露もなり家の井　風朗

乙二封にあふる時

露や茅亭詠らすにもなき　浅美

置てみるまゝ珠と見る庭の露　篤尭

月見の露もしらずぬる夜かな　道彦

煙草作
上州甘楽（カンラ）郡館（タテ）村より出るを館（タテ）の本場といふ
此辺十里四方にて作り出せるを総名館といひ
ふらすなり
春の彼岸（ヒガン）頃に種を蒔て苗床拵方（コシラヘ）凡茄子苗の
床に同し
見別の後丈二三寸になりて畑へ移し植るに
此見別る頃より切蛆（ウジ）とて黒き虫土中にありて
根を喰切事ありその時は甚だ損し代りを
植足すてなり
古集に 切蛆の喰たふしたる植烟草

ちゆしみて酒の糟（カス）干鰯（ホシカ）を用ゆ
葉たをかくは土用あけより盆過迄を専にとるなり
上の葉を天葉といふ其下を天葉下といふ其次の
下を中葉其下を中葉下その下を土葉上其
下を土葉と唄ひて各なり葉を採（トリ）て土間に
並べ菰莚をかけて至事二夜ばかりむし
ねかせるといふ
古集に 秋風や二番煙草のねかせ時
それより縄に挟（ハサ）みて干（ホ）に其仕様図のごとく
凡杭（クヒ）を二間程づゝ間を置て建て杵となし
是に縄三四十筋（スヂ）ほど引張掛るなり雨天の

時ハ縄を十まぢ程づゝ押寄て苫をかけ置く
炎天等十日ほども干又地乾として土間にならべ
二日ほども干すなり
又夫より家の中に釣置て農業の暇雨の日
或ハ夜なべ仕ごとに家内打寄て葉をのさく
種を採るにて一反の中五六本生立よきを其まゝ
置てとるなり此種極細末なるものなり
同国沼田烟草と称し一類あり利根郡沼田の
城下南在一帯が本場といふ種類館と異なる
り茎太く葉形大きく一尺七八寸中にハ弐尺あまり
なるもあり萌黄にて色美事なり

干やうハ竪の場所と遠ひ方に杭を二本
建てしばりにて煙草を挟ミし縄を引張
てシコロ干にかけるなり高さ壱丈七八尺もあり
又家の外廻り庇し下へ縄にたゝみ五六段
にもはりて干もあり縄の長さ取扱ひより
便利なる様に壱丈ぐらゐつゝなり
此烟草の一能ハ濡手にて捻るといへども火の
付ることなりとて東海の濱方漁師ハ多く
是を呑料にするとなり
又牛ゆゑに田家にてハ田植煙草と称して
梅雨中専用

又添粒に多く呑ても口中の障る事なし
秩父(チヽブ)烟草と称するは武蔵秩父郡小麦村と云
所を本場とす一躰押しなくて秩父煙草と
いふ味ひ舘(タテ)なりし一箇強(ツヨ)く匂ひのうるはし
き事他に類(ルイ)なし

廿一番

左 すまふ

お撲場やれ浮きいへまた念仏　一茶
押きつてとるや角力の取ひ毎　徐全
角力見字天窓たる覚悟　回人
まけさまて角力になりし角力かな　菜芽
取られずに足つよくぬきしお撲取　茶静

勝角力人に押されて戻りけり　西馬

又　をどり

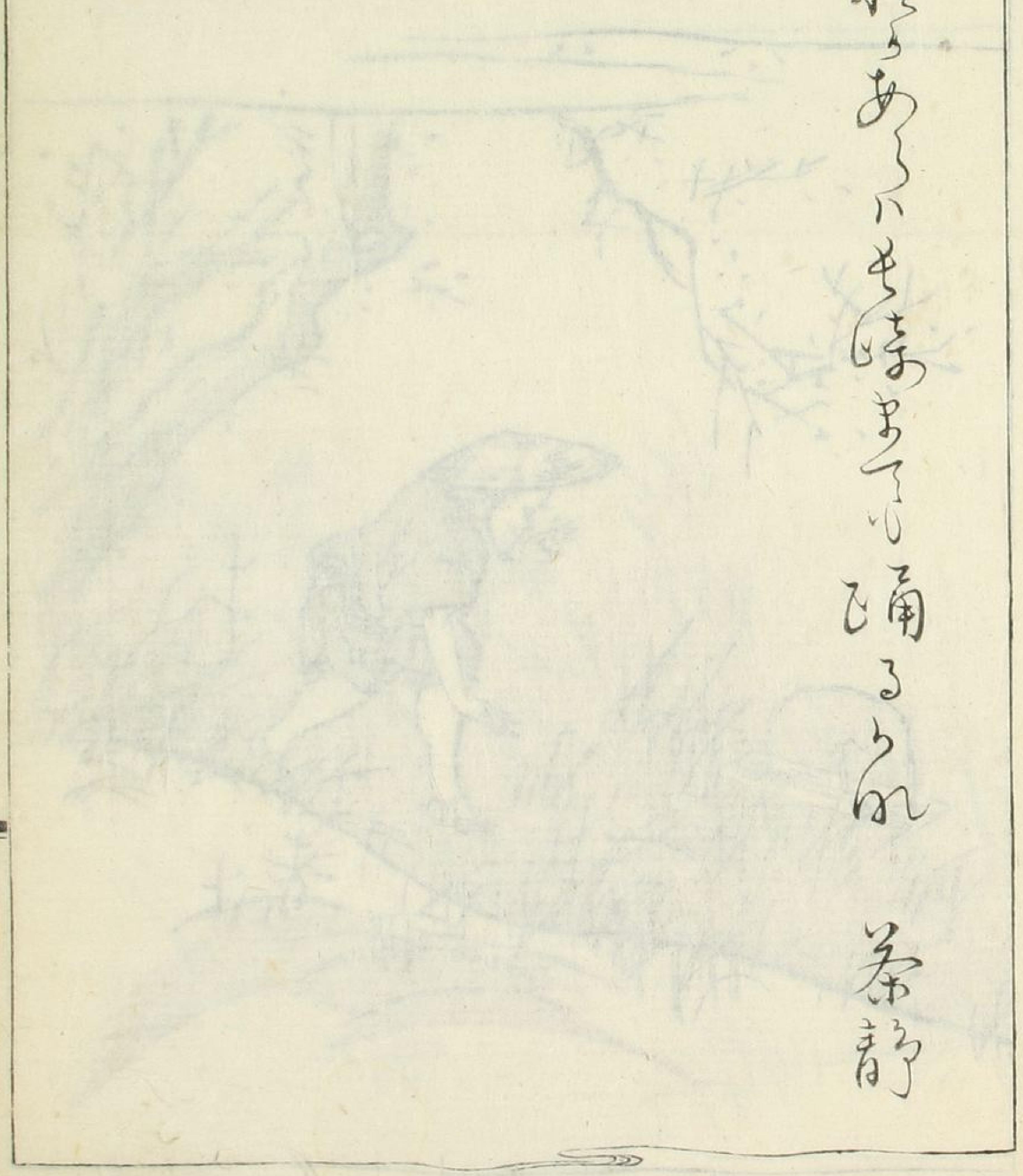
踊子や笛に出されしふれ　蝶児

踊子の髪乾とつけ見ゆるなり　萬之

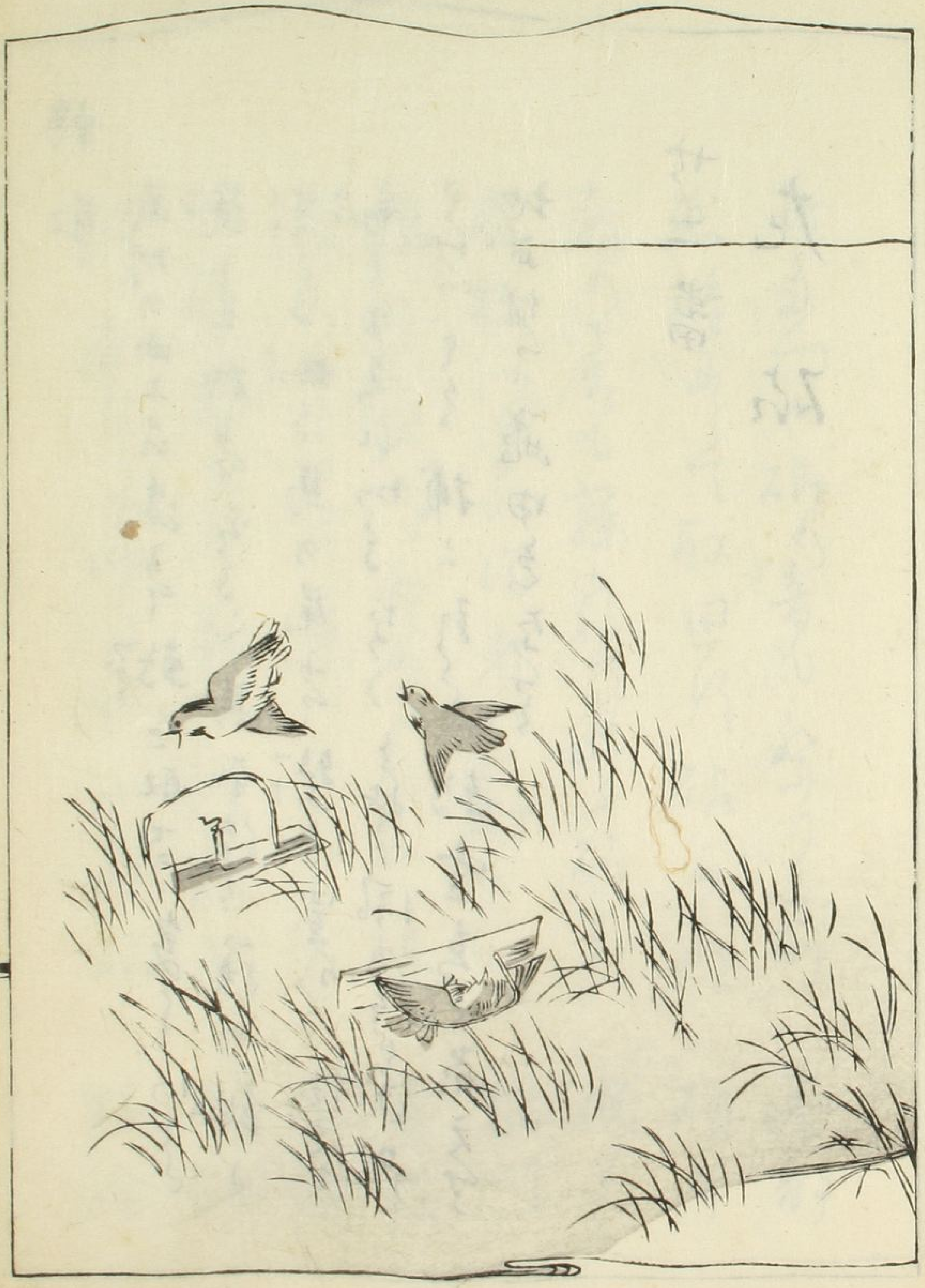
見人からし一組踊るをどりかな　呉竜

遠ふのかゝへてつむをどりかな　抱儀

秋の夜は志ゐて忘る踊哉　丁知



村あるハ木陰まては踊るらん　茶静



鶫取

武州の西上呂邊にて鶫を取る事多し　ほゝこ
籠といふ物にて取る也　其取様は籠の餌に
生たる蚯蚓を馬の尾にて繋ぎ置けば　蚯蚓の
動く由見えにかゝるなりと鶫　風のなびき見へ
うけてゐる　捕らるゝ　鶫　空高く飛立す
地に付て飛由見えたり

廿二番

衣砧

打ぬるや砧の音も冬の前　茶都

出稼ぎぬ衣取て回れば砧かな　頑布

恵の声も揉みて遠に砧哉　淺美

衣擣つ手に同者の鼻うかれ　稲州

慷まで人を晴ぬる近砧　素芯

海の音見て通しを衣擣　雲潭

一所に寄りて新の澄砧かな　作者不知

神遊びとも聞ゆる小夜砧　梅今

下り鮎秋は知らぬ埜の旅ぞ　笑完
遠くの野の明るる枯尾花　忍ん女

右　雁

早苗て競ひよる雁の足　九果
初雁の山田見渡し騒ぎ　鳳朗
夜の舎になると鳴わたる雁　喜女
初雁や嬉しき声を捨ての　由哲

去年も道ありける渡り雁　鳳朗

鳳朗老が四国行杖の留庵に
鯨洲まで迎に行ければ

越るとて大羽まじや渡り雁　茶静
差れ雁我らに落ち様もなし　擢堂
雁鳴て手の明星の薪もなし　茶山
けふからは日本の雁ぞ楽に寝よ　一茶
来おうさ雁ともいふ晴りなし　梅今

尾越小鳥網曳

下野足尾峠にて捕り鳥ハ鶍(イスカ)鶫(ツグミ)鵯(ヒヨドリ)鵥(カケス)等之中にも鶫多し早朝ニ二三百羽夕昏(クレ)ニ二三十羽ぐらゐつゝ安く取るよしなりされど其中に飼鳥になるもあり喰鳥に成もありとなり

廿三番

左　きり〳〵す

寒くの太しや鳴きりし安　真富

萩村や蟋蟀の中にきり〳〵す　一茶

鳴虫ハ秋なり秋ハ淋きり〳〵す　士朗

笛よりも蟋の中にきり〳〵す　茶静

待鶉と違し土間に鏡きり〳〵す　竹烟

鳴止て古き事も来りきり〳〵す　卓池

右　つくり鳥

急ふ名の思ひ出ならぬや渡鳥　露白

見さゝぬ中に跡ハ淋し渡り鳥　氣艾

行く〳〵て河原ふりあん渡鳥　茶静

降れ共土にて空の女めるも渡り鳥　作者不知

後れみて雀も飛ぶや渡鳥　秀竹

渡るにも渡る見飽ぬ小鳥哉　鶴年

臼作

磑臼ハ竹篇を上向へ八ツ下向へ六ツならべおけ
其篇の中へ松の木ヲ大割を打込透る所く
小割を打込造りたる也大さ径二尺位第一手
丈夫にして多く挽る事叶ふ物なり　此臼を
千俵挽といふ

磑臼に欅の丸木を以作るあり大さ差渡し五六
寸位三四十年以前まで是のミ以て臼の両
脇へ縄を付一人にて挽み向ふにいさゝかぬ事
ハ両足にて蹈張おきて左右の手にて是
縄を持たぐひちがひに挽用ひ来りしが今ハ
大かた止なり

又尺二三寸ぐらゐの方ハ小くして目の立方も変
なりといへり　碓を廻りを荒ふして中へ竹木田の
粘埴を詰大く粘きぬる所まで樫の堅木様を
打込て目を立たる也　此土を粘に醸バ水の中へ
苦塩を二割ほど交てまぜる也　依てかたまりて
後ほどくに崩る事なし

水戸の上町に磑臼屋甚上て是のミ作る職人あり
備前の国人家上手なり　醸ハ此臼にて二百石
挽ても目の缺る事なし

他国の臼にて五十石も挽ば目減して用に

ゑらび
松の茶木の磑臼の方を上品とし茶に艶
出てへる事なし
條埴の軽碓の方を下品とし茶に艶なく
有る事多しと聞り

廿四番

左　勝　茶

何となく思ふ初しも二日月　大瓢

初月をもみるに松の影ゆれ　葛三

塩さし流てみるや初月夜　卧息

待るを詠月を迎へに越えて来待　乙二

待月の宿し旅に出る旅の宿　其高

留守ちちちら出る水山の上　呉老

初月の出てみるや海を鳴る所　卓池

伴初の影河まで出て面白し　士朗

月影くし行く道も無りけれ　葛三

橋さや渡るゝ月に袖櫻舟　宇楠
出る所明らくして風の月　尚山
芋堀は土の中より夜が　其郎
ますれきれ明ぬ水海ゝ秋哉　風郎
留主ゐ月に懐に結ぶ気　茶静
諸人みな嘆き事も月に譲り聖　浅美
数多経手乗りたる月見舛　臥鴎
就菜一夜見待る事けりまる　仝

月に不知明白けり出舟かな　月宮

右名月

名月や光るあの音脆き　浅美
名月の秋も今宵に振り分ん　梅仝
名月や今宵陸中の膝枕上　仝
名月やきらりの命が嬉し　馬年
名月に今宵も笑ゝ無かなき　茶静

名月や火を焚付る中河原　一具

名月の野山を持し世捨人　葛三

明月や家路遥な草の山　仝

明月の小舟に浅き山の奥　又之

何所まても雲ゐ見えにあふて月夜哉　汐路

道すがら見て来し月も夜半哉　菊堂

さればこそ侘し筆に庵の月見哉　葛三

一ゆれの葦間のある月見哉　淡叟

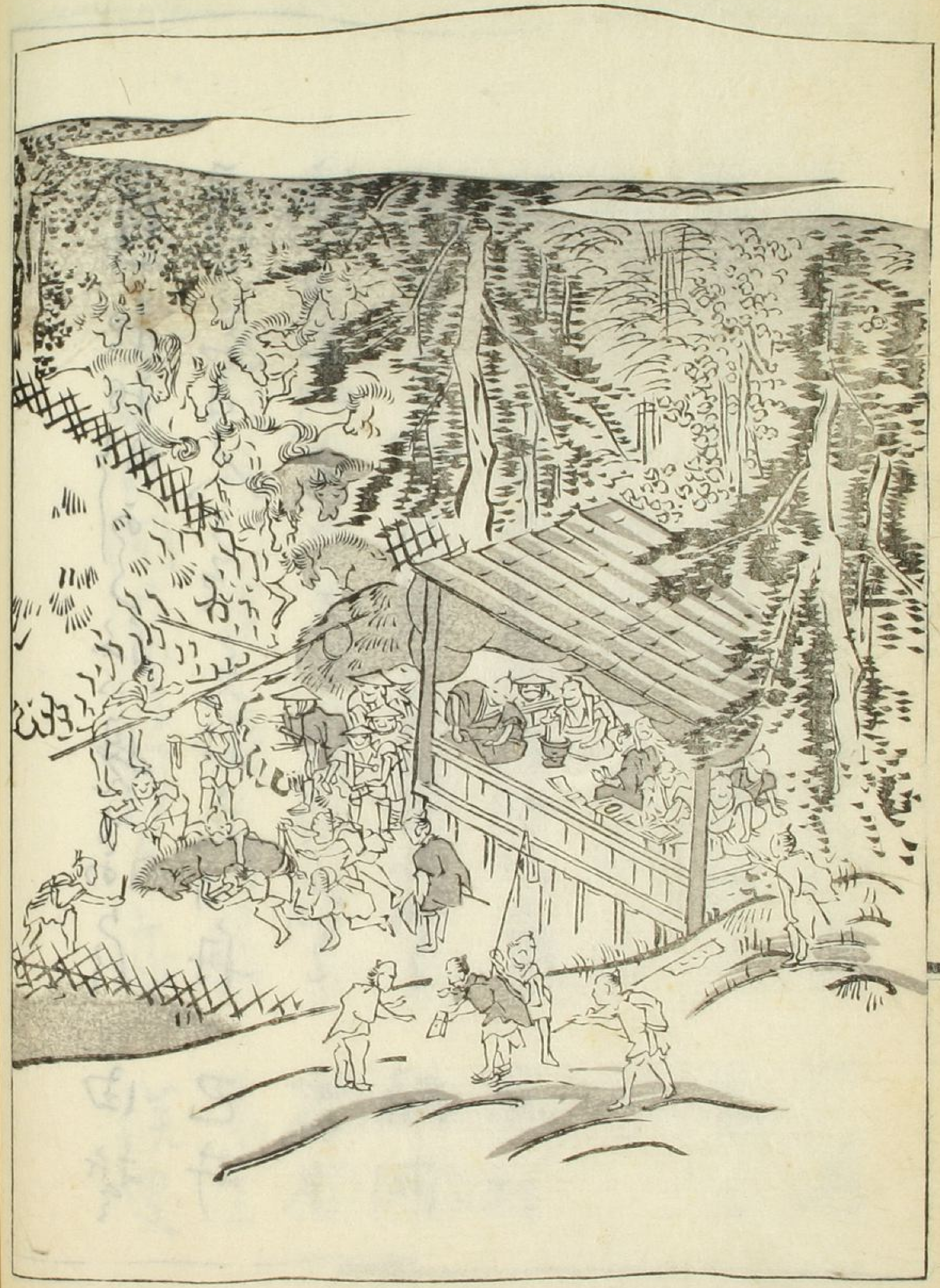
月一輪おほろの外は見えぬ夜か　由哲

月の宵人まちまち走り舟　巴井

海を出て出るを見れは遠き月　露泉

限りなき雲の奥から出るかな　雄淵

かゝやきのまた残るなり名残月　卓池



野馬取

下總小金の牧（マキ）の内高野内野柳澤なといへる
野にて春秋両度ばかり此お志の遠ふ五六ヶ所
あり一場所の廣さ大小もあれと縦三里横
五里も有らん前々より　命ありて郷の十
日も前より追寄にかゝり三四日以前よりハ歩人五六
百人又ハ中にも廣き野なれハ七八百人も出堤の上
一丁程の間に四五人つゝ立居て聲を掛原中にてハ
牧士七八十人勢子三百人程にて野馬を追立順々に
狭き所の方堅ハ幅二里の堤へ集て何ヶ所となく
切こまれらく追其方へ追こまるゝ初日よりまた三里

四方の野へ寄集二日めまて二里の野へ追入を三日
め朝ハ一里の野へ集るを前日ニハ二十町四方のかこひ
場へ一刀ニ追込事なり南北の野から南の方より
牧士勢子の者立ならひ北の方へ追立る中ニ野馬
のかしこきハなかなか勢子か透間より潜り抜く
引返し馬数足なり是を追廻し追駈るに林
あり山川芦原沼あり凸凹なる所を野馬ハ命限
りに逃走るそれを追駈逐つめ勢子の者も馬の
ひら首にいだき付追廻しを馬まて跳おさへ込んで
中に牧士まて乗馬にのりて走り付飛かゝり捕へん
とし又ハ乗るより野馬の背に飛移るなり

甚たしき野馬とて己か自在に駈馳る荒馬
なるを裸馬に志かみ付またかり馬の鬣を
のり廻りよろしき所にて取押へ次第に野馬
出来たり往古の戦場ハかくもあらんやと眼を奪
しきしだいなり其後ニ二十間四方ニ堤を
築立此かこみ場へ追込野馬の数凡三四百もし
何れも見物ありて堤の上ニ桟敷を鋪て
役所なりし御地頭所より出役なり其牧士の
頭役帳面を控て書留るなり其堤の下にすみ
場の中にてハ牧士三人程野袴にて出馬取まて
十人ほと居りて馬溜りより一足是と目がけ

あるひ追出さん牝牡のこ三四疋付添ひ番合
五六疋ならべて右の役所の下へ来る其中
ハ御用になるべき紀一疋を七八人かゝり追伏て
はに藁轡をかけ前より尾へ太縄をかけて
引出すなり馬ハまたなふれて野に遊むれしハ
いかなる事かやあいんとて驚き涙を浮め
かなしむ躰ながら引きさり曳出れバ二十町程
をハ馬一疋に十二三人かゝり曳うしみ牽々く夫
よりハ綰三四人にて酒々井の驛牧士の屋敷
まで引連送るゝ馬もたくあみていかなる所
ならんと物思ふ躰なりしも二十丁も牽るゝ

内に合点なさるもゐらん三四人にて追立れハ
足も急て歩行し
御用馬ハ三才ゟり四五三才迄にても來るひなき
を膝のあたりへ内野またハ内野とかくる焼印
をさゝへて放すと四五才まて　御用になるも
あり是を一両年野にて追もとすの事ハ所
一足目かけなるを押ゆるに射の五六足が邪魔
になる中之郷口の木戸をとふりき追出す所
子ハ四五疋飛立らたちまち廣野へ一さんに
走り逃行かのま狩野の画に野馬の騒を亂
し奔る所正に圖のことし孫いつまで野に

行てそこらを母馬を尋ぬれとも更に見え
ざる由ゑにかなしみゐる躰なりしがちかくて
牝牡とも野へ返されしを見て再(フタヽビ)尋ねくる
ことかぎりなし

牧にて馬を見るにて何まても大声にうかれ
それ掛ねの御役人帳に記(シル)し凡三百の中(ウチ)六七
十足取て再調の上御用馬何匹御地頭所へ
何匹と差出し残り何十足程は御払に出るゝ
なり近郷より集まりて値得買求る
馬は至てやすきなりしを物とかし中に気の有
りて只用をも兼に為すにおそるゝやうきこえ

三百足余を三所に堤を隔(ヘダテ)て百匹ツヽ一所に
置に離(ハナ)れ合ふことも更になかりし
此野馬取に見物をゆるし往還は近在より
男女夥(オビタヽシ)く出て群集し諸商人も来て藁(ワラ)
ぶきの小家を造りて軒を並べ出店し
物の人より商をなせる喰物ありて何にても
用の弁なるやうに持出る也とぞ

廿五番

花萩

今咲は露にそや持雲の郷　素駿

花むしろ見付てよりや萩の縄　眉山

戦くは花の追付く小萩かな　西月

こぼれ初て見ゆるものを露の色　素芯

咲からは重かるかり露の花　綺雪

庭掃やいくら萩にかゝりそめ　秋峯

鈴縄の端とも知らず萩の花　閑月

はきよせ咲けばちる程静なり　道年

結るほどに端にありける萩の花　茶静

起しおきもつれて曲る萩の花　茂美

紙燭もて行あかりみん花萩の花　年緒

花萩に乱れも静を持せみん　西馬

右　鹿

落かゝ活て萩待たらの風　千影
行くれ野さむ一夜や宿の鹿　卓池
伸あがる時に鳴けり萩の上　素檪
射る狩も鹿の鳴まで寝にける　台之
萩笛や出ておふさる淋し萩　生窓
鹿笛や吹て見すれハ人か来果　吏生

燕風や山の深みに鹿のまゝ待　一茶
鳴萩のうらゝかちれ栖かな　士朗
声ら呼て家の脇をあるしかな　西月
捨し物諸引のあまて萩の声　五木
しられ跡見て出き草の起ぬかな　逸嘯
鹿追の鳴をきゝて聞て居れかな　寿化

鮭打

越後にある所の川の曲角(マガリカド)へ川なかに丈(タケ)に簗杭(ヤナグヒ)を透間(スキマ)なく打て鮭の水中を登(ノボ)ることならざる様にして置(オク)ときハ鮭ハ勢(イキホ)ひに乗じて砂原へ上り砂の上十間あまりの所をも走りて又川へ入らんとするなり漁父ハ川の端に石なとを積てかくれゐるか其陰(カゲ)より長竿を持顕(アラハ)れ出て鮭の砂原を走る程よき所にて鮭の脊を打て取なり尤(モットモ)それか勢(イキホ)ひに乗りて走る事なれハ少し横(ヨコ)になりても起る事あたハずしてとらるゝなり

廿六番

花幾久

結あまき垣を逞しや菊の花　秀外

草むらに一吹志れぬ黙り花　素花

穂にくきを作りや菊の横遠ひ　月船

一色てなき一株や畳みけり　小集

大菊や今度も峙なり掛りて　一茶

孔雀とりしては庭から菊のもと　孫壺

清所からのぬるまで有て茶に淡　蝶六

くみちぎるまでも咲く垣かな　紀逸

河津通しても幾久見る九日かな　楚雀

西吹や笹をと揃る菊の香華　桂雲

きれむめが勝手廻る咲庭が　多めとめ

菊の香に存お長き山の町　圭布

作りなしで菊に咲ても志つらなり　翠川

咲しく菊に花なり九十月　茶静

右　紅葉

我宿の和葉見付し探ぐさり　萬之

見る人の唇乾くもみぢかな　滋美

帯ならを取りくて見せる紅葉かな　宇橋

てら谷を松お葉ちぬ太かなる季　緑咽

螺貝聞て小寒さ感し紅葉哉　太節

ちり残りてまつ森の下葉哉　寸針

人の跡来て通ふらぬ紅葉かな　丁知

ぬれみなからはれたる草より紅葉哉　素羽

花山や唯一本の梅もどき　清雁

あつきはれさつく返しもみぢかな　槙女

守明ら淋しく成りぬ夕紅葉　八朶

行燈も烟り川る紅葉かな　緑峯

川燈の上まで落ちもみぢ哉　淡叟

在あるに下葉を落すや艸紅葉　由哲

岩茸取　木茸取も同し

武州秩父山野品足尾峠豆称ふて澤山に

出川

廿七番

左　勝

霧を見ず出て何もなし間ぞ有ん　茶静

夜を明す聖霧ふ鯛の下洗ふ　青壺

朝霧や出行ほとつ出来る屋　恵公

大竹にほのさし霧の雫哉　梅令

めらりと汐木焚火の霧の中　源谷

耳障る鐘撞出まやすみ中　雪守

秋霧や膝の前の鳩の声　士朗

右　秋暮

田舎に問来る人の味無さ　茶静

秋の暮は桟橋に手摺物　仝

うつ向て旅人来るや秋の暮　蒼虬

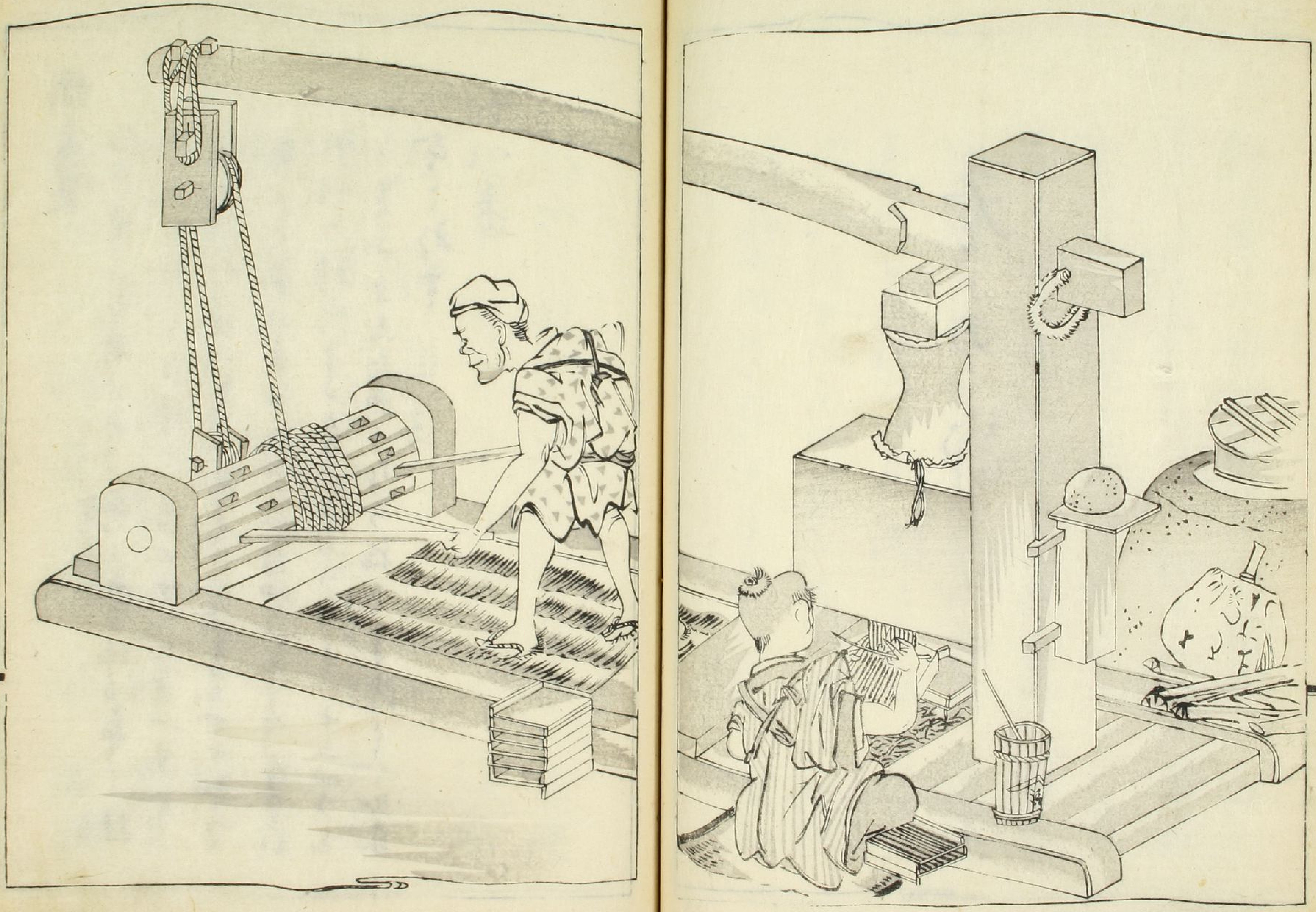
草の穂を離れて挟んで蜂の暮　一茶

立つ程失ふたる秋の暮　幸妻

啄まれし松火に物の見ゆる　道彦

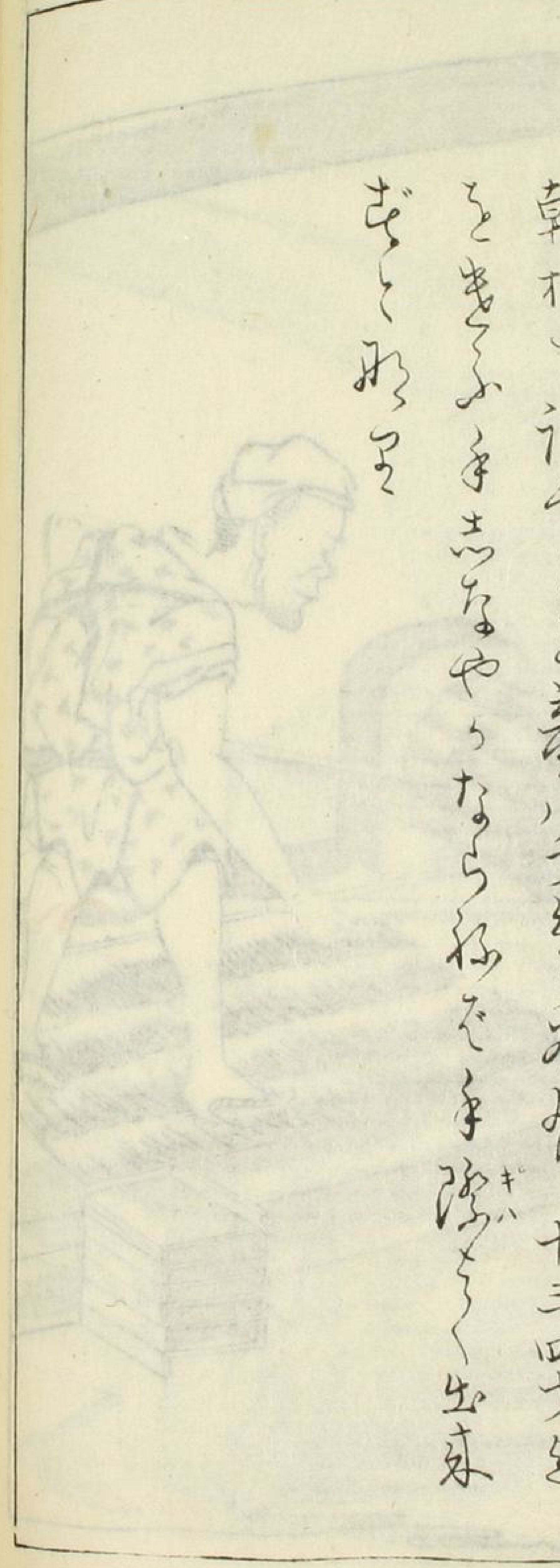
あまたなる鐘一と所聞ゆる程　葛三

冬の部



線香突

江戸にてハ本所にあり所〻にもあるべし抹香をこねて煉て筥の中へ入れ一方より重石をかくれハ筥の底より線香三四十本つゝ垂るを童の手にて抱えしなやかにしてまろに乾板へ請てとる童ハ十二三四才をとるきらふ手しなやかならねバ手際よく出来ざると也



廿八宿

花　神留主

ちるむよふ花ハよそて神もお立まれ　一茶

井の端ハ匂ひ立て神の花留主哉　由梅

上京へ来て花もあり神の留主　梅今

十月の留主とハいえぬ風の神　霧宗

麹屋の門掃てあり神迎　笛成

河にや笹流るゝ程神迎　泰静

右十和

畑仕事も足ル十夜の手繰かな　卓郎

鎌倉にて

はし傘の谷にたち寄る十和かな　一具

黒髪を照りしあふ十夜かな　八朶

何中て蝿を手代ある十和かな　茶静

翁行の吾罪妓に祝る十夜かな　葛三

門おほき家を探りける十和哉　月居

狐取

越後にて狐雪中に喰物をもとめんとて軒近く来りてわるさをなすとて瓢の頭を程よく切て中へ食物を入れて野中に置食物をくらはんとて狐も首を瓢の中へ無理におしこみすくらふに由なくゆらんとまきと頓にぬけざれば其ところを打殺して取なり

廿九番

左　時雨

ゆきあふれぬ旅して初時雨　鳳朗

お降はいなん二見乃神ある社　蒼虬

時雨そて小笹に戻る朝の風　まつめ

うつくまる鴨ぬ時雨のかゝりけり　起星

鳥乃眠をさめさせし時雨かな　暁河

やゝ浅き手ハ鷲も鳴れど　袁丁
ふあらき雲れ時雨にかはしつ　鳳朗
時雨とも知らずきく竹のおら驟　秋挙
あられ鳴や時雨の馬もれたり　卅有
時雨来て碓氷にまつる山の影　由誓
旅人に見ゆ鎧ゟ来し時雨かな　葛三
時もおもふ麻の葉ゆし時雨来　風石
吹なけき虹に押あたる時雨れば　晨支

都ちよみも物に時雨の深みゝ里　中納言
夜時雨にあつまる鯉の鳴子かな　蕉雨

右　木枯

光るもの手風呂の韻をさえたる　碩布
風や日かし鷲異美しれ　士朗
あらしやたきれ支楽のむさ霊　大梅
木枯や鳴子あるきて峰　鳥　萍石

凩やおつ津に消る山の形　崔角

毎るや凩吹て山は骨　茶静

木枯の後は吹ちる物もなし　月居

吹さつて凩の空から冴え星　卓堂

凩の吹よる鳴や菜の垣　泰静

こからしや連て何ときも何とせん　悠々

木からしの木の根にあつまる日影かな　い奈

こからしや絶て灯炷子蠅そこ一つ　梅令

木枯や寐るてさめぬ舟のうち　杜鷲

凩のやんでしまふ夜の長さかな　松什

こからしや月も爾きて雲もなし　風子

漆
掻
常陸下野ニ而季寄に夏の部ニ而候と
八九月より十一月まで掻人ハ越前に限
と云り往来に二三十人連立て所へ来りて
各別まて馴染の方へ行なり
山を買仕切て漆をとるに種々差別あり
事繁ければ略す
但羽州最上尤物なりと云出産の掻人ハ
越後岩船郡に多し惣て採初るなり
半夏の比と候す

卅菊
花落葉

落葉して菓木も枇を急ぎけれ　一具
山ぢやや落葉講じに立堀り　あつめ
まりよりは寿の花や来る落葉かな　士朗
落葉ぞみれは宮寺めける都かな　月居
落葉してね向ふに見ゆる小僧かな　一茶
汲先や落葉の下を潜る音　壺天
ものふる犬の吼ゆ落葉哉　紀逸
あつさ戌田思ひつゝ枯ておちりかな　一具

ゆるゝ鳴人もさらく捨て落葉かな　浅美

小坊主も風邪にしめる木葉　乙之

角包む牛房見ゆるや散木葉　仝

右　枯野

連なから立すても明る枯野かな　鳳朗

鳴る我も雁のつてあれ枯野原　春雀子

枯て薄に吹れ〳〵野河かな　梅通

焼鍋の跡もありちらしあさましかな　葛三

枯野から見ゆる人今あらさ寒さかな　壮貫

鰡の波戸に鰭る沓戸の枯野かな　舎瀬

旅人に吹去れ世に枯野かな　梅令

行人に高く鳴れ雑かれぬかな　南嶺

晩鐘ふ来てまた枯野原　まえぬ

枯野来て耳の我を得る霜哉　茶静

稲妻の風にもまれて枯野かな　淡叟

兎取

出羽にて兎を取るに雪中山の上より兎を追ひかけ鷹(タカ)の羽を投(ナゲ)下ければ其輪兎より先へ下るを見てもはや叶はぬ事と雪中へ頭を
つきこみ尻(シリ)尾(ヲ)を出して隠(カク)るゝ其所を網を
かぶせて取なり其時人の笠を尾花笠と
いふとぞ

廿一番

左 さむさ

雪なくてさんなき寒さは世なりけり　秋峯

腰械満福ちみそず　蒼虬

寺へ来ておがみし空の寒さかな

寒さのはさむさくらべの力かな　鳳郎

古墓の杭をたのみる寒さかな　廣陵

寒さ待て世まゐ人か小寒さかな　里之安

晴てきてあたゝかさも寒さかな　梅今

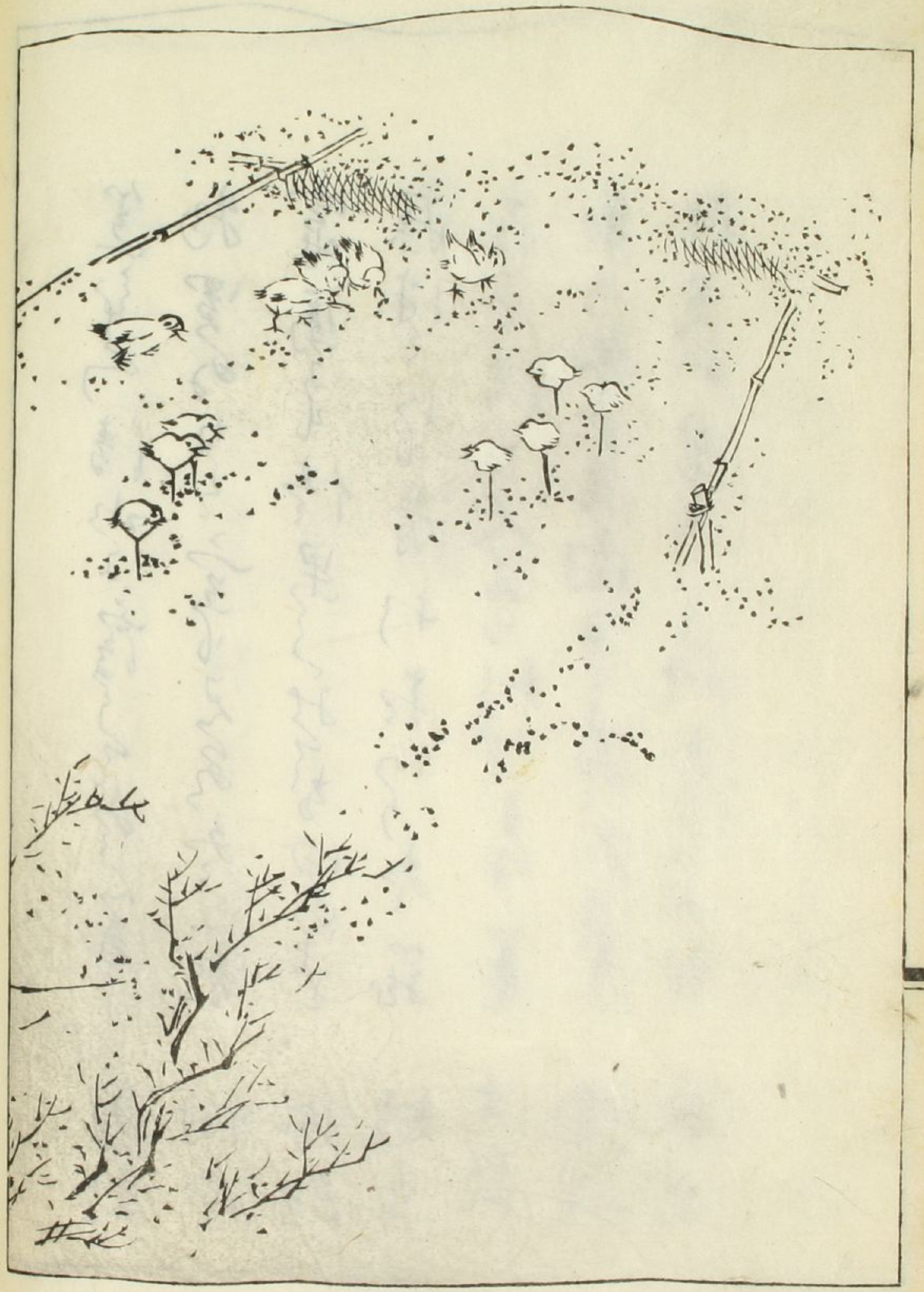
河渡て頭太き打寒かな　恭静

一人して帳面〆るさむさ哉　一茶
宵寝せしちらし元ゟ寒かな　園扇
竹も木も軒に空ゆくさむかな　蓑亭

右冬籠

窓へ来る雀強さも冬籠　素芯
雨二日楼に残りの冬籠　由誓
来年の宿や蛇も穴冬籠　月宵

笠とりて清水に寄る冬籠　蓁静
物買ひに出て空も見る冬籠　謝堂
窓馬も借果ての市もまた　鳳朗
探しはの骨折り握り冬籠　騏堂
夜を惜む人に似たり冬籠　士朗
粗ものゝ面白し冬も寺　南渓
旅先に寝て聞く冬も理　西馬



千鳥網曳

上総木更津又江戸大森にも此わざあり磯の
ほとりに竹を立て囮を木にて作り七八羽も
置かたはらに麦の糠まじへを餌に蔽網を
かけて取一度に五七十羽も取る事なり

廿二番

左　鰒

河豚とも知りて侍るまことに覚り　松什

鰒喰し噂は取らにかまで　露泉

家々鰒汁いふのに鰒を洗ひ　素撲

生ている鰒がら先へ料理の事　祖仙

一度さへ大事も河豚を思ひけり　嵐外

下箸と喰ふ人鰒にも久しき雑　清風

親ならぬ河豚に便めぬ婦とを　象堂

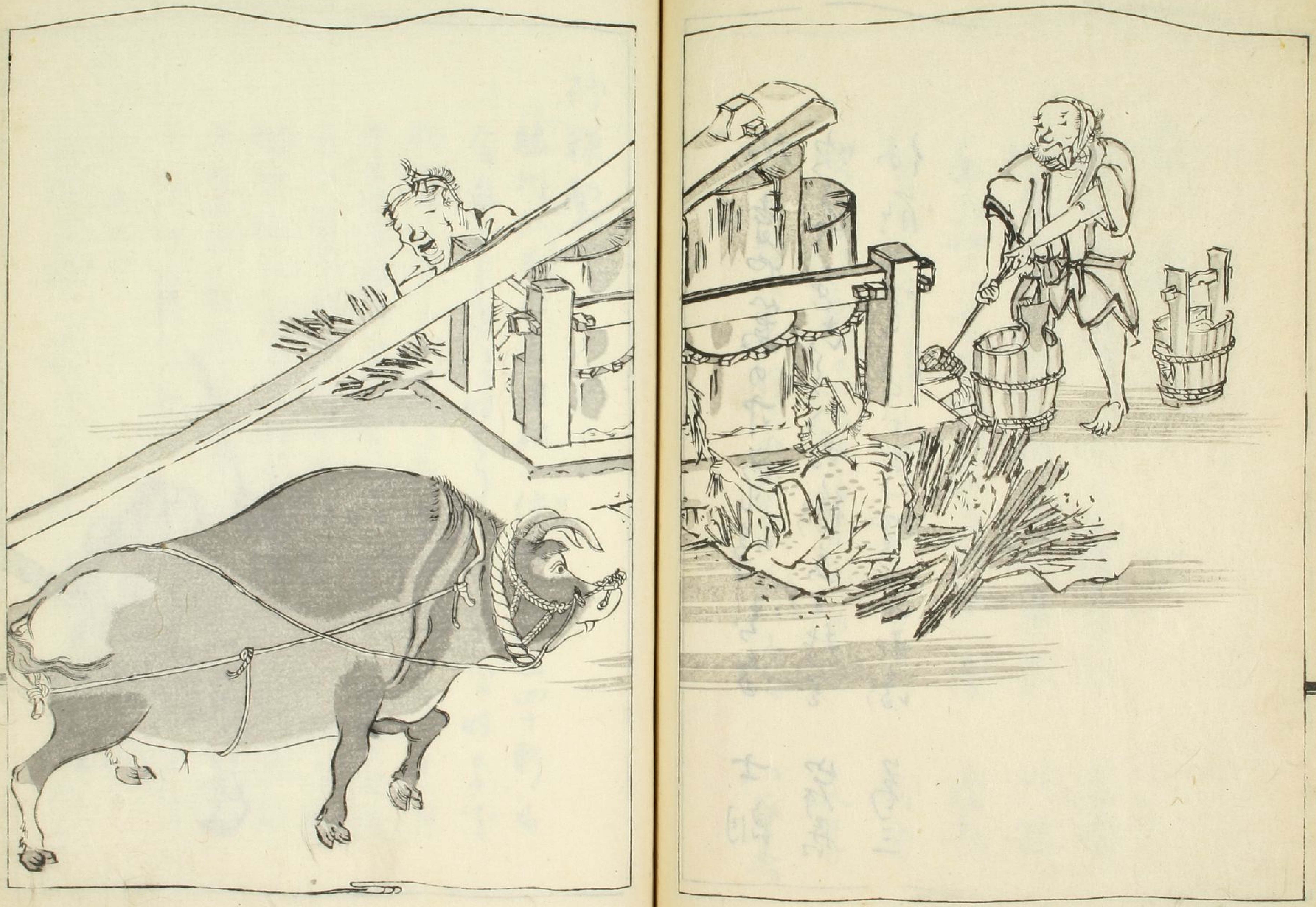
河豚喰ふ人もあはれ森ながら星　茶静

顔出して取らぬ害取る河豚汁　碩山

右　鶯

聲もなく戯し鶯の高音哉　茶静
かんここ大空になる千鳥哉　心非
あの世にも住り身の我友鶯　春静
皆るゝみれ啼さては鶯も千鳥哉　醒堂
吹揺る麻の間申る千鳥の声　文学
下る解立聲のなき鶯哉　八百善

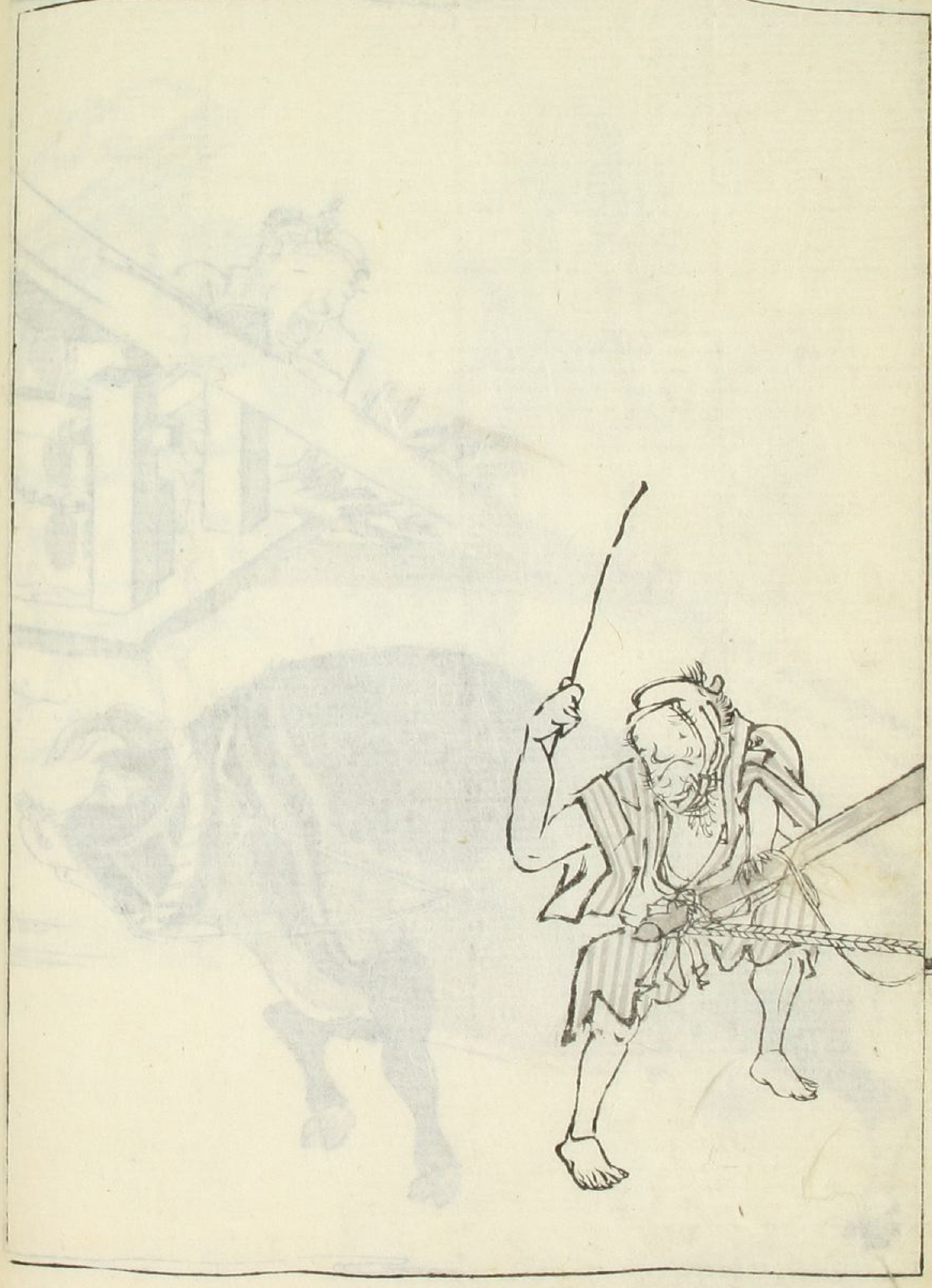
柳寺や竹の中みれ啼哉　士朗
吹て来もさへぬ鶯さへ鳴　岸居
梅菊へ物ら吹来る世に小杣鶯　蔦三



砂糖製

駿州江尻在岩原村に絞車(ロクロ)の数三四十軒も有昼夜八ッ时より翌昼九ッ时まで掛りて牛に引せるなり十月半より十二月中七十日程の间一昼夜に甘蔗(カンショ)二百貫目絞(シボ)るを定とせり五十貫目済ハ牛に餌を飼烟艸休をとる又五十貫目絞ぬれハ砂糖汁五斗五升程出る絞車かしかるく成て水かき时ハ甘蔗二三本一ッになりて又絞り直す事あり

右絞手両人居て甘蔗を喰(クハ)へさせる人ハ



圖の如く土を堀穴の中に半身を出して事
働(ハタラ)くなり
砂糖を製する人を別に雇ひて右の絞りし
水を大釜に入て製し揚(アゲ)となり
甘蔗を作る所は砂交りの地にて濱(ハマ)風の吹
所よしといへり
又讃州紀伊にも多くあり

卅三番

左
巨燵

手業をは友に去られし巨燵哉　多少
おくされ子おもひ出してこたつ哉　蕉助
出る間の脱きし淵も巨燵かな　再兒
冷いゆりてあつき宿屋のこたつかな　吟霞
お宿の旅籠に何ふ古巣哉　田楓
炉の燗するまで傍て這入しこたつかな　黄山
ならぬ間住居さ人の巨燵かな　泰靜

大山をこえて来ては志らぬかな　一點

母の八十筭の賀

めでたさは老ても高く積巨雄哉　茶静

右蒲團

日々みな起て寒さ身にしむ蒲團哉　草子

庵外にあるを思ふ蒲團かな　梅今

蒲團重ねるとも身にあまる宿屋哉　正阿

曉から起し晴き娘かな　祇白

眠の覚て蒲團に雪の音探す　風外

あかんせて物をかぶる我哉　由誓

月影も通る身や使ふ蒲團　冬映

寝かせみし馴染の何も使はん　富梅

見なれて暖る蒲團のあたゝか　梅今

卅四番

左 初雪

初雪や此日の本の幸や間もなく　露糸

晴るゝを見ては川雪の播り哉　守橋

起出て物干に付ある雪の類　由哲

初雪やとつより謹て言葉哉　桂堂

馬持の気遣ひなしに雪見哉　茶静

熊取

奥州南部出羽などにあり俗言(ゾクゲン)にまたぎと云
者熊身手足ともに熊の皮にて包み三人連
立背に苧(カラムシ)にて作りたる角なる炭俵(スミダハラ)やう
の物を覆(オホ)ひて其中へ米味噌椀着類など
入て上に鍋(ナベ)をのせ手に五尺位の鎗を持ち
雪中深山へ入り幾日も居りて穴熊を見
出し招(オビキ)出して突留(ツキトム)るなり
又熊と中よく体を組合なとして遊ぶ程
とき所にて突留るともいへり此猟師(レウシ)の
名をまたぎといふとなり

雪の中来て出ぬて雪見るかれ　白鴎

花の譏を見しも伊れみけり　葛三

懲されし雪見て申し習ふ筆　茶静

何那らん冬かれに雪の人　浅美

雪の人除て通りて通ひ字　湖山

申すみ人わり薯わりにこ申なり　鳳郎

那ら降ハ宗みなてさし雪の人　东芽

人家と失の埋る雪吹哉　西馬

宿取乃茶好きる雪喰の前　貞山子

込あらて風呂敷かり出て雪吹哉　八朶

酒こし皇妣もとる涼さかな　我泉

鳴て来て鳴て行なり雪の鳥　湖山

雪止て枝さ杖の小鳥ら筆　逸閑

雪みの諸や身に引受て夜の雀　旧人

雪れ秋の梯へ治る桜遠さかな　旭湖

中この身に那りさ粉の雪　霞泉

雪に音あるや夜明に嵐　茶静

右ゆき

雪の門さして寝ると明たりし　秋岸

蔵くちそれ小漏てぬるゝ小舩の雪　尚山

一さくら先茶に楼や堀れ雪　幻芝

進み出て雪見使や望ゝ里　一兆

不変る挨拶に成りぬ雪の宿　田人

雪の戸や出て足跡なる一と筋　可彦

降止て小暗くなりぬ雪の原　蘇人

溜り込地にも田るや田舎の家　緑園

打晴て雪や谷間に斧の音　一具

唯の雪と申されて悦ぬ人もなし　茶静

雪の日や馬とらする杖ひとつ　葛三

在寺や天井張らぬ雪明り　道彦

渡り鳥の大に集り中き落葉　禾葉

森ちかし火を焚音や雪の宿　気堂

行くて雪は暗くなる草鞋かな　風外

何さらに来るまて雪の積りけん　太珉

積さられ雪や白菊沈みけり　但々

たゝひきれて佇枝や雪の厳急　素芯

ともし梅けて暮る也つ木の雪　射峻

我見送立流す積て暮る雪　太節

雪国の此方暗くなりけり里　道彦

此年迄見ぬ雪ふる遊ひかな　梅舎

火振

物の相場を其日の内に遠国へ知らせん
とて山の上にて火振なり上方近所ゟ
伝り大坂より相場を知らするには信貴（シギ）山
へ取笠置（カサギ）山へ移し又伊賀の布引山へ
とり夫より勢州青笹山へうつし是ゟ津。松
坂へ取又昼ハ白赤等の幟を振て知らするを
遠目鏡（トホメガチ）にて見とるなり夜ハ松明（タイマツ）にて知る
となり

譬ハ左の方へ六度右へ七度前へ八度後へ九度振
時ハ米一石ニ付代銀六拾七匁八分九厘と知るなり

ふり立て揚け何処
在郷の火振ありけり　堯慶

廿五番

左　鉢たゝき

鉢叩ぼんなうあるゝハ菩提あり　河越

来る寒に違ぬ音なり稀叩　嵐山

何とゆめ袖ともに入る鉢叩　梅今

待てゐる先へ来る氣短なれ　令之

出ありきもとゝに止る鉢叩　麗中

咲志めし後ゟ見さしたる菊　宗牙

月見て妹に抱付れはなれたき　一具

右

節季候

脊負たる子も節季候の出立哉　梅令

はつ雪ふる梅の咲かゝり節季候　鳳樓

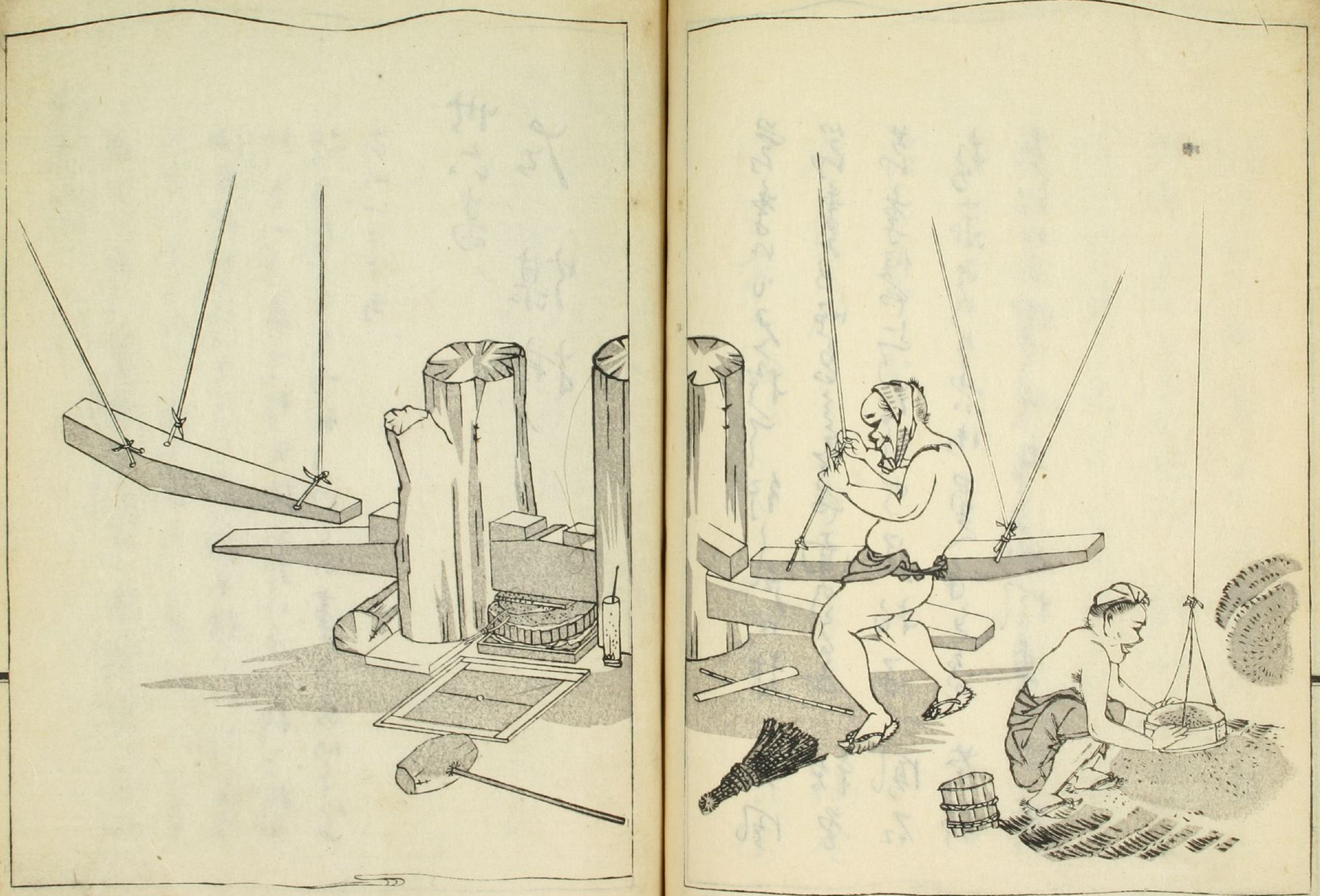
節季候は尺取て行し戸口哉　元風

節季候の呼戻したる面白さ　鈍叟

節季候や上りかまちの庭拍子　風石

梅咲みのはな法師出て呼さ氣　茶静

去れはの雲ちりてまはるや風車　一具



油搾木打

國々にあり菜種(ナタネ)を煎(イリ)て淺槇笥(ワク)の中へ入れしめ(シメ)木を打て絞(シボ)り取なり菜種一石ニて油弐斗弐三升とる也釣(ツリ)木振ハ細引(ホソヒキ)ニて杵(キネ)をつり並て打又振(フリ)木打ハ手に杵を提(サゲ)振りながら打なりかくの事をよんでしめ一口と云

卅六番

左 煤掃

煤掃に澤る筆の恩知れり　花川子

聖子て延るゝ雨や煤掃　深志子

煤取の深き瑞きに孫に寄じ事ん　茶静

煤掃や誰も骨折形のまゝ　松海

煤掃や海の泳ぎる極れもて　陽蕪

煤掃や莚の上に鳴くあるかな　士朗

ちゝそれ多犬の戻るも煤掃　茶静

煤見舞笑ふてもまた始りし　富桜

掃らぬ外も人の来てこそ庵の煤　乙人

煤掃や鶏遊ぶ向川原　青壺

すゝ掃や湯のぬるさにも一睡り　五木

煤掃を見送りし寝る気の時分　黄山

右 歳暮

延して寝てもゐらし歳暮哉　雨泉

袷入て着てみるや年の梅　幽峰

行年のいそさや梅のおそ咲き　立蛙

賑の余て年よる暮らかれ　菖三

年の暮聞みも遠し水明り　茶静

忘ぬ時の鐘も古にも遠し歳の暮　一具

年の暮忘れさる人の気遣哉　柳也

年の暮火にあふれて暮ちかり　茶静

年情も藪も立さる山の端　花川子

大晦日は法子に待て関をなし　西馬

大晦日杓の音さへも世はしなき　茶静
年の尾や箸納まりし此寿　梅令

はゝ柳支遍も中々その里し
なまきを以て難き事なるを
弟しらず生業に於てた
秋の夜ふ祢ふたりに書の日も
紀ば忘れのこちゝ手をまさなふ
我いとをしかうして如何なく
其道に身をを尽つるなりしぬる

ちかきわたり市街にすむともからハ
生業の利得あるを何ぞ田家に
手足あるハ耕作の辛苦を事と
するをかゝみに知らさるの類なり
須臾あらに携はる事みなきは
目にも遠く耳にふれさる事
あらは我友茶静争なき

山林海濱の人ハ志ありて
何れもとに多くの知を見ぬと
何その書にも見物にたる事漠
のみを推圖に見あるいは言葉
我尊くものなれは生にある
詩句をかきて梓に書し
絵手見物まて渡世の為也に

之雅なるを知らしめ童蒙をして
さゝし句ならずまきて俳諧に
道ちかくあるを思はさしめ初学に
教へむとは是法狂詠を
えらみ年に計算の以上了吟文いゝ
またあまた君を起る所業
撰りて柳より天明の昔より年

天保の今にいたるまで凡閏
折々撰数十万首を抜萃
きしりゝ上らに多識なり殊に
名吟の思を保す其間苦者おは
ら思はゞ其解す多寸眼の志に
たかまりて又世るを知りし左も
以て此事を家職に身をなし

末の風雅に心を寄する人々
たよらん此集の捨もち岐に
珂安へ学

天保十三年三月

坂富由誓識

華齋正緒書

撰者　井上清七
筆者　松本華齋
畫師　橋尚山
彫工　飯田源藏

江戸日本橋通四丁目
鬻處　書林　須原屋佐助